

私の心の準備が出来ているかどうかとは関係なくその時は来た。スタート地点から少し先にはコースの両岸に渡したワイヤーに沢山の鯉のぼりが吊り下げられている。ここに立つなんてひょっとしてとんでもない思い上がりか、或いは完走できるなんて勘違いだったんじゃないだろうか、と今日が近づくにつれ少しずつ大きくなってきた不安と、ここに立つことを最初に想像したときのワクワクした気分とがオーバーラップする。はっきりさせるべきがとうとう来てしまった。

レース最初のスイムは、全員が一旦海に入り、浮いた状態からのフローティングスタートで始まる。”30秒前”の合図で海に入る。立ち泳ぎなどしなくてもウエットスーツと海水のおかげで浮いていられる。もう何も考えていなかった。

とにかく一番不安だったのがスイム1500mだ。午前10時、およそ300名が一斉にスタートした。バトルの話は聞いていたが本当だった。泳いでいる体の下を泳いで抜いていくやつ。並んで泳いでいる二人の体の上を滑るように泳いで行くやつ。後ろから乗っかってくるやつ。肩に手がかかるので「なに？」と思うとクロールの手だった。顔はけられそうになるし。『こりゃあ、あまりくっついてゴーグルを蹴られでもしたら厄介だな』昨日風呂で一緒

になった大阪から来た選手の教えてくれたことを思い出しながら前を泳ぐ選手と距離をとる。自分のペースで泳ぐと前の選手に追いついて進めなくなる。そして又蹴られないよう距離を開ける。とにかく今日はデビュー戦だ。バトルは避けて、順位やタイムより完走が優先だ。些細なトラブルでも避けたい。

序盤1/3ほどの地点だろうか顔を上げて後ろを見ると、思いのほか私の後ろにも沢山の選手がいる。おおー、けっこうやし速いじゃんか。ていうかそんなに遅くもないんかと思ひ少しほっとする。

クロールは、ヘディングアップ（頭を上げたまま）で泳がない限り前が見えない。ブレス（呼吸）時に右横に並んだ選手が見える。『んん~きっとこいつ上手いんじゃないか』と思う。しかしよく考えてみると、半分過ぎて自分の横を泳いでいるということは大したことは無いのかと思ひ直したりする。

ところで気になることがある。左足の裏、土踏まずあたりがつるのだ。ん？なんで？練習のときでもこんな攣り方をしたことはなかった。左もも少し攣った。前日コースの下見を兼ねてバイクで島を一周したとき、痛くなった右ひざをかばい、左足に負担がかかったことに想像が至るのにそう時間はかからなかった。気づくと

ペースも速いので『いけいけん』とペースを落とす。練習では800mくらいですごくしんどくなり、1000mを越えたころからなんとなく楽になる。良くわからなくなる不思議な感覚だ。案の定800mくらいでしんどくなった。しんどいのは嫌なので『早くしんどくなれ』と思いながら泳ぐ。『練習と同じ、大丈夫だ。練習と同じ、大丈夫だ』と念じながら。

スイムの間中、三原やっさ太鼓が元気付けてくれた。最後の折り返しを過ぎたあたりで方向の確認に頭を上げる。なぜかこっちに向かって泳いで来る選手がいる。『ん？』と瞬間だが思考が止まる。折り返した時に回りすぎて、ほぼ反対方向を向いてしまったらしい。このころから何度も方向が判らなくなってスピードが落ちたようだ。『こりゃ今後の課題だな』と思いながら頻りに方向の確認をしながら進む。

顔を上げるたびに鯉のぼりが大きく近づいてくる。スイムゴールまであと100mくらいだろうか。ゴール近くの桟橋の上にカメラを持っている妻の姿がゴーグル越しに見えた。声も聞こえた。「がんばってー！！」と。かなり力を入れたのが見て取れる。両膝をすばめ沈み込むように叫んでいたのが見えた。折り返しの時は遙か遠く感じた鯉のぼりもいつの間にか通過していた。おもう少しだ。頭を上げて前を見るたびに間違いなく進んでいる。しばらく顔を上げないとかなり進んでいる。だからあまり見ないほうがいい。もう少しだと思うと精神的にゆとりが出てきた。あんなに不安だったスイムもクリア寸前だ。やった泳げた。1年前は平泳ぎで20mがやっとだったのに海で1500mも泳げた。自分が誇らしく子供のころのように嬉しかった。『俺ってイケてるかも』と思った。でもビデオで見たらぜんぜんイケてなかった。

桟橋を過ぎるとすぐゴールと思っていたら、その先にまだ波止があった。今度はビデオを構える義妹の姿が見えた。もう余裕だ。けっこうお茶目な私は何かしなくちゃと思う。頭上で両腕を大きく丸め、両手指を頭のてっぺんに立てるポーズを考えるがあまりに不謹慎と思い、カメラに向かってのピースサインで妥協。後からビデオをみるとやっぱりあのポーズをやっけば良かったと思う。残念!!。来年にとっておこう。うん、来年はぜったいやってやる。

さて、いよいよ浜に近づき海の底がゴーグル越しに見えてきた。『よし。泳げたぞ』と確かめるように、水中で砂地に足が降り立つのを目で見ながら、何十分ぶりの砂の感触を踏みしめる。イメージではここから颯爽と浜を駆け上がり、バイクの置いてあるトランジションエリアまで走るのだ。が、あれ？

足が、、、左足が、特にももが痛いのだ。かなり痙攣しているのにこの時初めて気づいた。スイム序盤での左足裏とももの違

り、1000mを越えたころからなんとなく楽になる。良くわからなくなる不思議な感覚だ。案の定800mくらいでしんどくなった。しんどいのは嫌なので『早くしんどくなれ』と思いながら泳ぐ。『練習と同じ、大丈夫だ。練習と同じ、大丈夫だ』と念じながら。



スイムの間中、三原やっさ太鼓が元気付けてくれた。

## 今年の8/27は”暑い熱い”1日でした。 わくわくレター9月号 44歳の夏 トライアスロン 参戦記 inさざしま 山本幸士

和感はこの予兆だったのだ。水際でアキレス腱伸ばしの格好で2、3度筋を伸ばし駆け上がろうとするが、足全体が痙攣して膝が曲がらず、一本の棒のような感じだ。左足を引きずるような心もちで駆け上がる。『やばいなあ、、、』言葉にならない不安が表情まで曇らせたに違いない。係員のいる砂浜を通過すると通路にシャワーがある。ここで体を洗いうエットスーツを脱ぐのだが、脱ごうと左ひざを伸ばしたそのとき、意識とは無関係に「ビシッ」と左足が硬直。また強い痙攣だ。数回の屈伸のあと腰を下ろし楽になる体制を探す。足を伸ばしつま先をそらしてみる。余計につた。「あ、いけいけん」とすこし慌てながら違うポーズを探す。腰を下ろしたまま、左ひざを曲げ抱え込み、つま先をそらすとかるうじていいみたくて、強い痙攣は治まった。「困った。くっそおっ」と思いながら足をマッサージする。横を何人もの選手が抜いていく。『このまま治るまでいたらびりになる。やれるかなあ〜』



抜いていく選手を横目に痙攣した足をマッサージ中

という思いがよぎる。でも数回しかしなかったランの練習でも、走りはじめに膝裏がつりかけたことは何度もあった。それをかばいながら、だましまし走ると何とかだったので『今日も何とかなるはずだ』と思い立ち上がり、左足を引きずる気分でバイクに向かい走る。それでも左ももはかなり痛いので、途中から歩いた。これからバイクに乗るのかと思うと気分が重い。憂鬱だ。バイクのところまできたら、順序良く置いて準備していたタオルで体を拭き、サプリメントをほおばり、右膝にサポータを付け、シャツを着る。そしてサングラス、ヘルメットの順に身に着ける。体がぬれていてシャツが体にくっつき着るのにこずった。おかげで予め安全ピンで付けていたゼッケンがちぎれる始末。慌てそうになるのを抑えて付け直す。本にシャツはウエットスーツの下に予め着ておいたほうが良いとあったがその通りだった。

足の痛みをこらえ、バイクスタート地点までバイクを押す。係員の誘導どおり左車線でバイクにまたがりスタートする。痙攣した太ももの上側だけに負荷がかからないように裏側も使うように意識してペダルを漕ぐ。『これからバイクとランで合計島を5周かあ、ながいのお、、まあなんとかするべ、、』とまずは42kmのバイクをスタートした。そこからものの500mほど進んだところで、反対車線をこちらに向かってバイクを押してくる選手がいる。『あ、きっとリタイヤだ、』反射的に『体かな？練習不足かな？パンクかな、、』と詮索する。あまりいい気はしないが、気に掛けずペダルを漕ぐ。速い選手はずごいスピードで追い抜いていく。『え、うそ・・・、、』そこそこ走れるだろうとのささやかな自信は『やっぱりの そうよのお〜』と跡形もなく崩れて消えた。もうこうなるとタイムや順位はどうなろうと、自分の力に見合うように、オーバーペースにならないように走るしかない。前日の下見を参考に1周25分くらいが目安だ。

このコースには大きく分けてアップダウンが2箇所ある。2周目の最初の登り坂だったろうか、右ペダルを踏み込んだとき

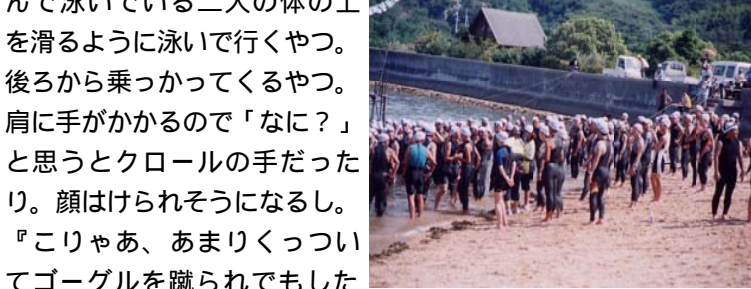
に右足が「ビシッ」と硬直。『うわっ いけん!』足が伸び切って言うことを効かない。左足に続いて今度は右足の痙攣だ。突然のことにプチパニック。バイクには乗ったまま何とか右ひざを曲げ、その後は出来るだけ右ひざを伸ばさないように心がけペダルを漕いだ。そもそもサドルの高さは膝が完全に伸びきらないように設定しているのだが、油断すると膝が伸びてしまう。右ももを手で揉みながら走る。厄介なことがひとつ増えてしまった。

でも、とここで思う。『コンディションが万全で予想通りの展開で進んでいる選手って果たして何人いるのだろうか、みんな何かしら問題を抱えたまま走っているんじゃないだろうか』と。『なんかそれってスポーツだけじゃなくて、仕事でも日常でも同じことだな』と、いわゆる生きることの縮図のような気がした。競技時間がとても長いのでいろいろなことに思いが巡る。力に見合わない無理をすると調子を崩すし、コンディションの悪いところはかばわなければならない。自分の体や気持ちと対話しながら進めていくところに醍醐味を感じた。

バイクで1番辛かったのが1周目。2周目と3周目はなんとかなりそうなイメージがあったのでペースアップする。周回するごとに本部前付近で応援の姿を探す。2週目は弟の赤いシャツ3週目は妻の姿が目に入った。いよいよ後1週。足が痙攣したときにはどうかと思ひもしたが何とかなりそうだ。それにしてもバイクでも随分抜かれた気がする。かなりのスピードで抜いていった選手が多いので、周回遅れは間違いない。そもそも私がバイク2週目に入った時には、速い選手は既にランをスタートしているのだ。

ところで町内からもう1人この大会にエントリーしている選手がいる。丸山選手だ。レース前に一言くらい言葉を交わしたいなとゼッケンを探したが見つからないままレースは始まっていた。バイク2周目の2\*位のところだろうか、海岸線でランをこなす青いユニフォームの背中に彼のゼッケンが見えた。『やっと見つけた』。昨年はこの大会で2位に入賞しているだけあって今年も上位に行く。さすがに速い。バイクで抜く際に後ろから「丸山君がんばれ!」と声をかける。近くに近い私が競技中にトップクラスの選手を激励するとはおかしな話だが、やはり応援したくなるものだ。

長かったバイクもやっと終わりだ。バイクゴール地点で『止まってー降りて降りてー』と最後は女性スタッフが両手でバイクを真正面から受けて止めてくれた。ピンディングと呼ばれる装置をはずしバイクから降りると、バイクで走っているときには感じなかった両ももの痛みに気づいた。またまた気分が重い。何より両足が鉛のように重い。トランジションエリアにバイクを置いてシューズを履きかえるなどのランの準備をするのだが、あまりにも多くのバイクが既に置いてあることから、順位がかなり後ろのほうなのが容易に見て取れた。鉛製の両足のせいもあり、”はぶてそう(=いじけそう)”な気分だ。おまけにここは本部テント前で、最終ゴール地点も兼用の場所だ。こうしている間にも続々と最終のランを終えた選手がゴールしてくる。実況と司会をかねている女性スタッフの『選手ゴー



浜で入水の合図を待つ



まさしくバトル  
いわしの群れと言った人もいる



ランを2位でスタートした丸山選手 頑張れ!

ル　～　お疲れ様でした～』  
『　選手おめでとうございまあ～す』などの明るい声に反比例するように私の気分は”どよん”と沈む。『は～、、、わしこれから10\*□も走るんか。信じられん・・・』

見かけによらずヨレヨレです

**両**ももが本当に痛い。コースに出て程なく、妻の姿。『両ももが痙攣して痛い』と走りながら伝えると、「無理せんように」とのこと。『、、、って無理しようにも出来ん』とか『もう無理しとる。無理せんかったらゴールできん』とか『無理ってどこからどこまでが無理でどこからどこまでが無理じゃないんじゃろ?』とか『無理せんようにっていうことは、無理だったら無理せんようにリタイヤしろってことか?』とか、わけのわからないことが頭の中を巡る。

『ま、とにかくあと10キロの辛抱じゃ』と黙々と走り始める。とにかく足が痛いのでスピードが出ない。スピードをあげようとすると両ももが痙攣しそうになるので痙攣しないぎりぎりのスピードでヒョコヒョコ走る。『今、時間がどれくらい経っているのだろうか、、、』目標の3時間半はいつの間にか無理な気がしていた。

**ラン**をスタートしてすぐ、後ろから足音が聞こえていた。1\*□も行かないうちに抜かれた。また抜かれた。いっぱい抜かれた。そもそも子供のころから持久走は嫌いなので、抜かれることには抵抗はあまり無かったが、こう次々と抜かれると嫌になる。最初の上り坂で歩いている選手に追いつきそうになるが、こちらも走っているとは言い難い超スローペース。近づいたと思ったらまた少し走るのでなかなか追いつかない。それでもいつの間にか追い抜いていた。

「**今**何時ですか?」給水所で尋ねる。一応の制限時間とされている2時まではあと1時間15分ある。なんとか2時までにはゴールしたいと思う。ぎりぎりだなこれだと思う。"あと7\*□"だったか"3\*□地点"だったかの看板が見えた。3分の1か。まだゴールするイメージは湧かない。そのうちさっき抜いた選手に追いつかれ「頑張りよう」などと言葉を交わして並走する。「いま何時じゃろ?」ひたすら時間の気になる私が彼に聞くと2時には間に合うだろうとのこと。

**バイク**も**ラン**も島を周回するのだが、給水所やエイドステーションと呼ばれる救護所が何箇所もある。ここで選手は中学生から年配の方まで、地元ボランティアと思われる大会スタッフが差し出してくれる水やスポーツドリンク、スイカなどを受け取り補給することが出来る。

**もちろん**沿道では島民が思い思いの応援をしてくれる。選手名簿が渡っているのだろう。名前を呼んで応援してくれる人もいる。最初は前を走る選手が名前を呼ばれて応援されているので、『知り合いの応援か、、、』なんて思っていたがそのうち自分にも応援があった。私のゼッケンはねじれて判別できにくかったのだろう。

**その**うち私がジワジワ遅れだした。あまりにゆっくりなので、沿道の会話が聞こえる。「2時までにはやあ着かんのじゃないか」とか、私を置いていった少し太めの選手のことを「ありゃあ大きなけえしんどかろう」とか話しているのが聞こえる。確かにその選手の呼吸は私よりはるかにしんどそうだった。私が持久走が嫌いだったのはもちろんしんどいからなのだが、今回

ばかりは呼吸がぜんぜんしんどくならない。足をかばってあまりにスピードが遅いので心拍があがらないのだ。そのせいか信じられないことに汗も出ない。腕などは不気味なくらい乾いているのだ。汗が出ないので給水所では出来るだけ体に水を掛けてもらうようにした。これが気持ちいい。水をかけると体温が下がるのか体が楽になって少しだけスピードが上がる。これを繰り返した。トップクラスの選手は2時間前半のタイムでゴールするが、最後のほうは私のように4時間くらいかかる選手もいる。炎天下でのレースだ。遅い選手ほど暑さが堪えるのだ。

**5\*□**の看板が見えた頃、前方にまた歩いている選手が見えた。だんだん近づいていく。どうやら義足であることが見てとれる。私が抜くときには歩道脇の縁石に腰を下ろし左の義足を外しているところだった。義足の状態が悪いのか付け直しをしているように見えた。何か声を掛けたかったが、言葉が見つからず無言のまま先に行ってしまった。

**そろ**そろゴールできそうな気がしてきた。見通しの良い海岸線にてで何人かの背中が見える。道路がS字のため海も見えていい眺めだ。『もうかれこれ2年か、、長かったなあ～』としみじみ思った。トライアスロンに出てみようかと頭をよぎったのは1年ほど前だが、そもそも事の始まりはダイエットを始めたおとしの8月だった。急に妻の事を思い出した。短気で、多分あまり優しくもない私を良く支えてくれたと思う。食事も私だけ別メニューだったことも珍しくない。嫌な顔、めんどくさそうな顔をされたことも一度もない。それどころか良く励まされたのを思い出す。『ありがたかったよな』と思うとこみ上げるものがあった。母も私の食事には気を遣ってくれた。頼んでもいないのに、皆は揚げ物で、私だけは焼きものだったりするのだ。プロのスポーツ選手でもあるまいし、普通はここまでしてくれんよと思っていた。だから帰らなきゃと思った。ゴールするというより帰らなきゃという感覚だった。妻と子供達、弟夫婦、そして広島からも1人友人が応援に来てくれていることがそろそろ楽しみになってきた。

**あと**2\*□くらいのところでまた後続の選手に追いつかれた。中にはすごい勢いで抜いていった選手もいる。ランは得意でもスイムやバイクが苦手で後ろにいたのだろう。50半ばのおじさんもいた。お互いに「頑張りましょう」と交わしながら走る。

**の**こり1\*□の看板が視界に入る。あと少しだ。このカーブを曲がればもう少しだ。サングラス越しにコースを反対からごつい人が歩いてくるのが見える。時間も時間なので、沿道にはそろそろレースが終了しかけた雰囲気か漂っている。ああ、地元の人が歩いているなと思う。『ん?』良く見ると赤いシャツの弟だった。あまりに帰ってこない私の様子を見にゴール地点から探しに来たようだった。「今何時?」すかさず尋ねる私に「2時3分前」とのこと。ペースアップはするが『2時は少し超えてしまうな。ちょっと残念。』などと思いながら走る。今度は小学生くらいの女の子が走ってくる。すれ違いそうになる寸前に末娘の桃子だと気づいた私は「ももっ!ももっ!」と走りながら数回呼ぶ。「あ、とうさん!」と向きを変え併走する娘。「なあなあとうさん?　ごーるするとき一緒に手をつないで行ってもええ?」嬉々として私に訊ねる。「ああ、ええよ」と私。「やったー　じゃあ行こっ!」家族と手をつないでゴールする選手を何度も見たらしかった。さっきまでゴールで妻と待っていたのだが、あまりに私が帰らないので迎えに行くといってゴール地点から来たのだ。息を切らせながら100%くらい私と並走

しただろうか。いよいよゴール間近。本部付近では荷物を積み込んだ軽トラックもいる。もう後片付けに入っている部署もあるのだ。

**い**よいよ近づいた。帽子とサングラスを剥ぎ取り「よっ行くぞ」と左手に娘の小さな手を握る。メイン会場に到着、つないだ手を大きく掲げフィニッシュ。憧れのゴールだった。タイムも順位も初挑戦の私にとって問題ではなかった。あのとき想像してワクワクした場所に本当に来れたのだ。感無量だった。



ごーるゴールごーる(^0^)/

「そりゃーよかった　タイムはどうあれ完走するのとリタイヤするのは後がえらい違いですよ」と言ってくれた。とても嬉しかった。「また会いましょう」と握手しながら笑顔で別れた。

**島**に渡って来る時、フェリーの中で出会った女性も選手だった。といっても出会ったのは私ではなく娘達だ。いつものことだが娘が図々しく話しかけ、あろうことかその人の長い髪で遊んでいる。それでも嫌な顔ひとつせず娘達の相手をしてくれていた。そんなことも有り顔見知りになった彼女だが、この人は　ほっとしていますとても速かった。女性の部で4位だ。ゴール後聞けば、私など話にならないくらい速い。また先月も皆生大会に出たばかりという。皆生大会は国内で最初に行われた歴史ある大会だ。しかもこの大会はロングと呼ばれるスイム3\*□　バイク　145\*□、ラン42.195\*□の大会である。今の私には到底完走できそうに無いハードな大会だ。華奢な体で物腰の柔らかいイメージからは程遠く、これには恐れ入った。

応援団と一緒に

**翌**日の中国新聞に『義足の鉄人再び完走』の記事が掲載された。『あの時縁石に座っていた選手だ。ゴールしたんだ。良かった。』気になっていたので安心した。次に会ったら言葉を交わしたいなと思う。新聞によると「今回も膝の痛みと戦いながら走った。バイクを終えた時点で180位前後だった順位が徐々に後退」とある。ランの5\*□付近で止まっていなかったら私より随分速かったのだ。

**片**足の選手がもう1人出場していたらしい。その選手は義足は付けず片足のまま競技していたと聞いた。スイムはものすごく速かったそうだ。バイクは片足で漕ぎ、ランはなんと松葉杖で走ったとのこと。私より常に　また会いたいものです前を走っているのでレース中の私気づくことはなかった。これにも全く恐れ入った。

**帰**りの車中、私にはあまり話さない長男が『泳ぐのはちょっ

といけんけど、自転車と走るんなら出来そう』と興奮気味に話してくれた。そして以前の会話を思い出した。

**私**「とうさんがトライアスロンに出るのどう思う?」

**長男**「ぜったい無茶じゃ思う」

**大会**後に長男が自転車通学をすることが多くなった。また、雨の夜、塾から濡れながら自転車で帰って来た時は、『やりゃー出来るんじゃ』と、自分に言い聞かせるように呟くこともあったらしい。大会を目の当たりにして何か感じるものがあったようだ。これが頑張った私への天からの褒美に思えた。

\*\*\*\*\*　あとがき　\*\*\*\*\*

**トライアスロン**は　"泳ぐ(以下スイム)"　"自転車で走る(以下バイク)"　"マラソンで走る(以下ラン)"　の3種目を1人の選手が連続して行う複合種目です。鉄人レースなんて呼び方をされることもあります。その距離は大会によってさまざまです。一見すると、とてもハードルの高そうなスポーツに見えますが、案外そうでもなく、例えばイギリスでは『トライアスロンはピギナーでも参加しやすい』などといわれ、毎年10%ずつ競技人口が伸びているほどです。

**オリ**ンピックでは2000年のシドニーから正式種目になり、スイム1.5\*□、バイク40\*□、ラン10\*□で行われています。このオリンピックディスタンスのレースを”ショート”と呼びます。私の初挑戦の舞台になったのは、今年で17回目を数える三原沖の”佐木島(さぎしま)”で行われたショートの大会です。バイクが42\*□なので合計53.5\*□のレースでした。

**こ**こは人口1000人ほどの若者の少ない島でした。大会役員も、この人は若いなと思うと50歳過ぎのようで、中山間のわが町よりも少子高齢化が深刻そうでした。今年の大会も開催するか否かを最終的には住民投票で決定されたと聞きました。開催への苦労が何われ、商工会青年部活動などの経験のある私にとって他人事のような気がしませんでした。経済効果も期待できるわけではないだろうし、ここまで続けてこられたのは、島の活気や、一度灯った灯を消したくない気持ちはもちろん、集まってきた選手たちとのふれあいを尊いものだと感じているからだと思います。しかし中には参加者のマナー問題もあり、そんなことも反対派を産み開催を投票で決定せねばならぬ理由のひとつのようでした。なんだか歯がゆく切ない気持ちです。

**しかし**、目立たないので島の人も気づかないかもしれませんが。魂のごちそうを味わったというと大げさでしょうか、44歳の私ですらこの大会で素晴らしいものに出会えたわけです。だから私は、17年間の島の人々の努力と苦労はかけがえの無いものだと確信するのです。

**今**回、3年連続6度目の優勝を果たした三原市職員の福元選手は、このさぎしまで育ててもらったと明言します。彼はこのわずか4日後、スイスで行われる世界選手権を控えていたにもかかわらず、「さぎしま大会に出ずに世界に行く気にはなれない」と周囲の心配をよそに出場しました。そしてスイスの世界大会でも30 - 34歳の部で見事5位に入賞したのです。(中国新聞より)また、この大会でプロになる決意をした中学生(今回総合5位)もいます。いま中学3年生の彼は来年からプロとして活動するそうです。彼らは島の誇りであり、また彼らも島に自分のルーツがあると感じているのです。

**そして**、島に集う選手と、島を守り島に住む人が、立場の違いを判りあって、通じ合う事こそがこの大会の宝物ではないかと思うのです。